

■HOME

古城探訪 / KOJYO TANBO

石垣の見方 / ISHIGAKI NO MIKATA ～古城の魅力は美しい石垣にあるといっても過言ではありません～

石垣の種類を見分けよう！

石垣の種類が見分けられたからといってどうってこともないのですが、これを知っておくと石垣の年代判定ができるということです。細かく言い出したらきりがないので、代表的な例をあげておきます。くわしく知りたい方は専門書を読まれることをお勧めします。

石垣の種類を判別するには、

◆「石材の加工の程度から3種類」

◆「積み方から4種類」

に分けるのが最も単純な分け方です。

◆石材の加工の程度から3種類



野面積 (のづらづみ)

自然の石をほとんど加工せずに使う。



打込接 (うちこみはぎ)

石材どうしの接合面を打ち欠いて接点を増やす。



切込接 (きりこみはぎ)

石材を完全に整形して互いに密着させる。

慶長の築城大盛況期には打込接が圧倒的に多かったといえます。それ以前は野面積が主流でした。

そして年代が新しくなると切込接が増加する傾向があります。つまり、

野面積⇒打込接⇒切込接

という流れで石垣の種類形式が発展的に移り変わっていったといえます。

だからといって全てがそういう見方で時代判定できるわけではありません。地域によって利用できる石材の種類も異なりますし、普請時の藩の経済状態、城内での位置関係(目立つ場所か否か)が影響し、新旧の逆転が珍しくないからです。たとえば浜松城の野面積は幕末に積まれています。

◆積み方から4種類



布積 (ぬのづみ)

横方向の目地がよく通っているもの



乱積 (らんづみ)

横目地が全く通らないもの



谷積 (たにづみ)



亀甲積 (きっこうづみ)

石材の積み方は左図の4種類に大きく分けられます。

城の石垣ではそのうちの布積と乱積の2種類が基本形式になります。

この2つの形式と先にあげた石材の加工の程度による3つの形式を組み合わせると6種類の形式に分類されます。

石材の形が比較的良好揃っている場合にだけ布積が可能となります。

石の形が不揃いの場合は必然的に乱積になりますが石の積み方に高度な技術が必要となりました。

織田信長の安土城の石垣普請を担当した石工の穴太衆(あのおしゅう)は高度な石垣技術者集団であり、その後、全国の城普請に召し抱えられたといえます。

積み方の残り2種類である谷積と亀甲積が城の石垣に応用された例はあまり多くありません。

谷積は明治以降の主流です。江戸時代では中期以降の切込接の場合にわずかなだけ用いられました。

亀甲積はきれいに成形してあるので

明治以降の積み方で石材を斜めに落とし込んだもの

六角形に成形した石材を積み上げたもの

見栄えはよいのですが、高い石垣には応用できませんでした。

もうひとつ石垣の年代を判別するのに比較的好く用いられる見分け方があります。比較的好目立つところにある石垣で判別するため、大変実用的でお薦めできる方法なのですが、

◆「石垣の隅部の積み方」で年代を判定するのです。

◆石垣の隅部の積み方



算木積(さんぎづみ)



算木積(さんぎづみ)のない隅

隅石に直方体に近い長石を用い、その長辺と短辺とを互い違いに向けて積み上げる手法。

隅石に用いられる石も他の部分に用いられ大きな差異はない。

算木積は天正年間(1573~92)にはすでに見られますが、関ヶ原の戦い以後の全国的な築城大盛況期に急速に発展し、慶長10(1605)年頃に完成した積み方だといわれています。

完成された算木積だと長辺が短辺の2倍以上となる隅石を用い、石垣の下端から上端まで乱れることなく整然と長短交互に積み上げられています。

ですから、そういった完成された算木積であれば慶長10年以降、そうでなければ慶長10年以前と推定することができます。

元和元年(1615)、幕府は武家諸法度を公布して、新規築城と居城の増改築を禁じます。また修復の場合は事前に届け出ることを義務づけます。

寛永12年(1635)の法度改正により、櫓や城門の修復の届け出は必要なくなりましたが、石垣と土塁の修復は引き続き届け出が強制されました。

そうしたこともあり、元和元年以降は石垣を大々的に築いたり、修復したりということはなくなりました。結果、元和元年を頂点として石垣築城技術は急速に低下していきます。

明治以降に積まれた石垣は慶長年間の頃の石垣とは技術的に見て大きな較差があるのは注目すべき点であるといえます。

さて次は巨大な石垣のルーツを探ります。

なお、ここに掲載した内容および図版は「城の鑑賞基礎知識」三浦正幸（至文堂）を全面的に参考にさせていただきました。

■NEXT